

## 式 辞

厳しい冬の寒さも和らぎ、眼前に輝く内浦湾を渡る微風にも、春の訪れを感じられるようになりました。

本日、ここに、PTA会長 赤塚顕爾様、並びに保護者の皆様のご臨席を賜り、北海道長万部高等学校 第七十五回卒業証書授与式 を挙行できますことは、誠に喜ばしく心より厚く御礼申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与されました十六名の卒業生の皆さん、改めて、卒業おめでとうございます。

皆さんは「和而不同」の校訓のもと、何事にも真摯に向合い、学習活動や学校行事、生徒会活動、部活動にと、努力を重ねてきました。それは正に、掛け替えのない、貴重な時間であったに違いありません。そして、本日、本校における全ての教育課程を修了し、卒業を迎えました。これまでの皆さんの努力に敬意を表するとともに、心からお祝い申し上げます。

保護者の皆様、本日はお子様のご卒業、誠におめでとうございます。これまで、深い愛情を注がれたお子様が立派に成長し、この佳き日を迎えられるましたこと、心よりお喜び申しあげます。

また、これまでの三年間、本校の教育方針並びに、教育活動にご理解とご協力をいただきましたことに、教職員一同を代表して、心より感謝申し上げます。

さて、卒業生の皆さん、今、皆さんの心の内を去来する想いは、どのようなものでしょう。伝統と歴史のある長万部高等学校の三年間は、一瞬の出来事のように、巡っているのかもしれませんが。

皆さんが活躍するこれからの社会は、加速度的に発展を遂げ、正確に予測することが困難な未来が待っています。そこでは、環境や社会の変化、価値観の変化に対応する力が求められます。当然、用意された答えなどありません。誰かが教えてくれるものでもありません。解なき解を求め、自分なりの正解を見つけるための人生なのかもしれません。

今日を境に、置かれた立場や環境は大きく変化します。皆さんの多くは、愛され守られてきた保護者や故郷から、お別れの時を迎えます。今までのことを振り返り、感謝の気持ちを忘れないでください。

詩人の中原中也は、「生ひ立ちの歌」という詩の中で、自身の幼少期を

私の上に降る雪は

真綿のやうでありました

と詠いました。幸せな生活を、真綿のように優しい「雪」に例えて表現しています。しかし、その「雪」は、年齢を重ね、現実の社会の中で、「霰」や「霰」「雹」へと変わって行きます。時には「ひどい吹雪」となって中也を苦しめますが、最後は、

私の上に降る雪は

いとしめやかになりました

と表現し、自分の人生を回顧しています。

皆さん、守られてきた場所から、未知なる世界に踏み出す準備はできていますか。誰にも譲ることのできない、大切なものをその胸に、しっかりと持っていますか。

自分に嘘はつけません。人生という舞台の主役は自分、脚本も演出も、全て自分次第です。

恐れることはありません。皆さんには若さがあります。若いということは、それだけで限りない可能性を秘めています。これからの未来を創造するのは若者なのです。

皆さんには、目の前の現実という「壁」に負けることなく、生きてほしいと願っています。

本校で培った「何事にも真摯に向合う姿勢」を忘れないでください。明けない夜はありません。何かに追いかけられるより、追い求める人生を歩んでください。

今まで皆さんには、多くの話をしてきました。その話の根底にあるのは、「どのように生きるか」という問い掛けでした。

旅立ちの時を迎えた卒業生十六名に贈る最後の言葉は、

「幸せであれ」

ということです。

皆さんにとって、どのように生きることが、自分にとって幸せなのか、これからも追い求めてください。

自分が見つけた「居るべき場所」で、最善を尽くし、一人ひとりが幸せになってください。

これから歩む道は、一人ひとり違います。その途中、皆さん上にはどのような雪が降るのでしょうか。そして、雪が解け、人生の春を迎える頃に、どのような「花」を咲かせるのか、期待しています。

結びになりますが、本日の輝かしい門出に当たり、卒業生の皆さんが夢を叶え、生き生きと活躍されることを心より期待するとともに、ご参会の皆様方のご健勝を祈念申し上げまして、式辞といたします。

令和八年三月一日

北海道長万部高等学校長

土 屋 靖 雅